

## 人間教育講座「明徳会」

—— 高木兼寛が求めた医師像 ——

東京慈恵医院医学校は明治36年に医学専門学校に昇格したが、その頃から高木兼寛校長は学生の品性、品格を涵養するという目的で「明徳会」なる講座を開講した。毎月一回例会を開き、講師として名僧大徳を招へいしてその講義を拝聴するというかたちであった。会長は高木兼寛校長、幹事は樋口繁次教授であったが、この二人の熱意と講師陣の厚い好意によってこの明徳会はながく(昭和12年頃まで)30年以上も続けられた。そしてその「心の教育」の影響はきわめて大きく、後の慈恵精神といわれるものの強固な土台になった。また講義を受けた当時の学生は生涯このことに感謝し、昔を懐かしんだ。

### 1. 序

1995(平成7)年のあの新興宗教・オウムのおこした事件はまことに大胆で無謀な殺人事件として多くの人々に衝撃を与えた。この事件は狂気の教祖の心の闇(怨念)が起こした事件であるといわれるが、さらにマスコミによるとこの教祖の周辺には多くのインテリがおり、彼らは易々とこの教祖のお先棒を担ぎ、平気でサリンをつくり、これを撒いて大量の殺人を犯したということである。しかもこの実行部隊には、ほんらい生命を守るべき医師が二人も加わっていたというのである。

優秀な若い知識人がどうしてこんなおかしな宗教に易々とのめり込み、教祖の非道な殺人計画に加わってしまったのだろうか。彼らが学校でうけた教

育が、そのような計画を阻止する力とはならず、かえってそれに利用されてしまったのは何故だろうか。いったい彼らにとって教育とは何であったのだろうか。

この事件はわが国の教育の欠陥を遺憾なく暴露することになった。そしてこの国における教育をもう一度考え直させる結果になった。心の教育の不在がこのような青年を生み、あのような事件をおこしたのではないかということである。

養老孟司（東大解剖学教授）は、このことを新聞紙上で、日本における教育の原点はいまでも教育勅語（明治23年発布）にあり、そこには守るべき徳目（マニュアル）はあったが、それを生みだす宗教と哲学の欠落があった。そしてこの欠落こそがこの事件の元凶だったのではないのか、と述べている。「わが国の教育はいまも教育勅語の精神で行われている。教師がそう思っていないだけである。勅語の内容に別に悪いところはない。『父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己を持し、博愛衆に及ぼし、学を修め業を習い、以て智能を啓発し、徳器を成就し、進んで公益を広め』て、何が悪いか。天皇制もちゃんと護持されているではないか。

戦後教育は勅語の内容を表面的には消した。しかし勅語の精神は残った。その精神とは、公教育では宗教と哲学を教えないということであった。言い換えれば教育勅語という人生マニュアルに欠けていたものは、自分で人生を深く考えること、そして自己の思想を持つこと、それでもって自分の行動を支配することであった。それを教えるものこそ真の宗教と哲学であったのに、勅語の精神はこのことを危険だとして教えなかったのである。」というのである。

養老は、明治以来の日本の教育は自己と人生の意義を考える宗教と哲学を教えなかった、自己の思想をもつ努力をさせなかった、そのことが現代の様々な弊害を生んでいるのではないかということである。

## 2. 明治政府の修身教育と高木兼寛

すでに明治期に教育のこの欠陥に気づき、激しく批判していた人物がいた、高木兼寛である。

明治維新は、幕藩体制を崩し、西欧文明を手本にして近代化をすすめるという点では成功であったが、国民のモラルをたかめるという意味ではあまり成功しなかった。1903(明治36)年におこった教科書疑獄事件はそのことの象徴であった。教科書採択をめぐるおこった贈賄事件である。県知事4名、府県視学官、師範学校校長、中学校・女学校校長、小学校校長など計152名の多くが検挙され、116名が有罪になった(この時から文部省による国定教科書制度が始まった)。

高木は、この教科書疑獄にみられる道德の失墜は、それまで道德を支え養ってきた神道、儒道、仏教を新政府がすべてこれを見限り、修身教科書(明治5年)の如きマニュアル(徳目)のみを教えようとした結果であると主張した(これは上の養老孟司の考えとまったく同じである)。

高木は、親交のあった伊藤博文公爵に、この問題についての自分の疑問や意見をぶつけている。(高木の思想をよく示す貴重な資料であるので少し長いがこの中に引用する)<sup>1)</sup>。「この教科書疑獄事件の原因をよく理解しておられたのは故・伊藤博文公であった。この事件がおこった時、伊藤博文公にこの高木兼寛がご質問を申し上げた、『この度の疑獄事件は如何にお見做しでございますか』と、伊藤公は『イヤー誠に困ったことができたわい』とこう仰せであった。『何故でござる』『いや明治五年以来解決出来なかったことはこの問題であった』『それはどういうことでございますか』と申したら、『森有礼をして日本の教育制度を新に布かしめる時に、精神修養上何をもって基本とすべきかという問題が起こったのだが、これをとうとう解決することが出来なかった。そして遂に修身教科書の編纂(明治5年-筆者)ということで茶を濁す結果に相成った。それでも、まだ学校の教員を信用しておって、これをもって教えたならば当たらずとも遠からずのものが出るのではないかと期待し

ておった。然るにこの度の事件は、この期待を完全に裏切り、県知事をはじめ中学校長、小学校長までもが悪いことをして獄屋に繋がれるという、まことに痛嘆に堪えぬ結末に相成った』というご返答であった。伊藤公の申された通りであります。この事件以後にもご承知のとおり事件が絶えませぬ、多くの学生が自殺を計る、また他人を簡単に殺す。殺すにしてもごく僅かの金銭の奪い合いで二人三人五人十人と殺す。伊藤公の申される通りまことに由々しき状況であります」。

高木によると<sup>1)</sup>、日本人の思想すなわち大和魂、武士道なるものは、本来神道、儒道、仏教によって養われてきたものである。この思想の実現したところの成果が、すなわち明治維新であった。故に明治維新の大事業は大和魂のいわば花ともいうべく、従ってまたそれは神道、儒道、仏教の養成した花でもあったというのである。

(高木はさらに続けて)<sup>1)</sup>ところが明治の新政府は、新しい思想を養うべき宗教を選択することができなかつた。神道にも儒道にも、また仏教にも依存することができず、また新しくキリスト教に拠らせることもできなかつた。そのため議は遂に便宜的に修身教科書を編纂するという事に相成った。しかも編纂するにあたっては、それまで神・儒・仏三道によって養ってきた個々の徳目(マニュアル)のみを羅列するという結果に相成った。今仮にこの徳目なるものを草木の花に譬えるなら、この花を集めて花束をつくり、これに実をみのらせようとしたわけである。そして花を教えていたら(つまり徳目を教えていたら一筆者)、何時の間にか花が枯れてしまったというのである。それは当然のことであろう、今までは神儒仏三つのものが一つの根になっていたからこそ花が咲いていたのである、この根を絶って、花だけにして、水をやったり、水を揚げさせたりしても、根本たる滋養物の根を欠くからには花は枯れていくのが当然である。これがすなわち今日の日本の道德教育の現状である ということである。

明治政府の近代化政策は一応成功したが、国民の道德はかえって衰退した。心はかえって貧しくなった、これからは何か日本の道德の根本になる、新しい神儒仏をつくらねばならないというのが高木兼寛の主張であった。この高

木の神儒仏三道というのが前述の養老孟司の宗教、哲学に相当することはいうまでもないであろう。要するに二人の意見によると戦前戦後を通じて、修身教育、教育勅語の徳目のみの教育は随分とやられてきたが、その根本（座標軸）となる宗教、哲学についての教育がまったくなされてこなかった、これが日本における道德教育の欠陥だった というのである。

### 3. 高木兼寛の人間教育

高木兼寛は5年間の英国留学を終えて、西洋医学の真髄を学んで1880（明治13）年に帰国した。彼はその地で自然科学としての医学のみならず形而上的な問題までも学ぶよう努力した。「英国に参って一番に感じましたことは、この国の思想がすべて宗教（キリスト教）を基本にしていることであります。これをみて私は成る程これではなければならぬと強く感じた次第であります」と回想する通りである。

帰国したのは、ちょうど日本の開業医の全盛時代が始まるころであった。金儲けにはしる医者が多く、貧しい庶民からは遠い存在になりつつあった。当時の医療ジャーナリスト・長尾折三はこのように嘆いている。「医師という職業は利益を追う職業なりや。…暴利貪欲飽くことを知らざるは、そもそも何の心ぞや」と。近代化の進展とともに浸透してきた功利主義、経済至上主義の影響であった。

高木は、このような医療状況（医風）を改善し、この改善を推進する医師を育てる方策として、成医会なる医学団体と成医会講習所なる医学校を設立した。成医会の結成目的は「専ら医風を改良し、学術を講究する」ということであった。

成医会例会でも、しばしば医師の悪風が指摘され、これを改善する方策が論議された。この会で指摘された悪風には<sup>2)</sup> 1) 医師は互いに助け合うのが本来であるのに、却って誹謗しあい、他医の欠点を暴いて己の失敗を隠す如き行為。2) 患家で他医に遭遇するとき、ことさら尊大な態度をとり、甚だしいときは相手を面辱する如き行為。3) 診療にさいしては商人の如き根性をい

だき、病気を診るよりは患者のご機嫌をとるが如き行為。4) 最新医学を学ぼうとする気力がなく、診察、診療はただ外見を派手に飾るのみの行為。などがあった。

同時に悪風にたいする改善案も提示された<sup>2)</sup>。その一つは開業免状(医師免許証)の正当な与奪であった。成医会の意見によると、医術開業試験(医師国家試験)はただ知識を論ずるのみで、人物、品行に及ぶことがない、したがってもし医師に破廉恥な行為があれば、直ちに開業免状を取り上げることが必要である。また医学生の間で不品行の者があれば、直ちに開業試験の受験資格を取り上げることが必要であるという。医学生にたいしてはしたがって、狭い医学の知識のみならず、広い教養と、高尚な思想を養成せねばならないと強調した。

### 入学試験に「品性試験」

高木が1881(明治14)年に設立した成医会講習所は、実は乙種医学校と称され、卒業しただけでは医師になれず、医術開業試験に合格せねばならなかった。そのためこの医学校は開業試験のための予備校的色彩が強く、試験に合格しさえすれば何時でも退学できるという雰囲気があった(その典型が当時最大の乙種医学校・済生学舎(ドイツ流自由教育制度の医学校)であった)。

しかし高木は、この医学校を卒業しないうちは開業試験を受験することを厳重に禁止した(場合によっては卒業前に受験したとして退学させた)。彼は、英国流の教育法にしたがい、各学年のカリキュラムを重視し、出欠をとり、学年試験、卒業試験を厳重に行い、それに合格した者にのみ開業試験の受験資格を与えるようにした。また、時間の余裕のある時には、新しい医学の現状についても講義した。そのため、この医学校は教育界からもたかく評価された。

高木の熱心な教育法によって、この医学校(明治24年に東京慈恵医院医学校に改称)の医術開業試験の合格率はつねに抜群であった。そのため試験官は、今日は慈恵院学校(この医学校の俗称)の受験性が多

いから、この試験場からは定めて合格者が多いただろう、などと噂があったといわれる<sup>4)</sup>。

またその頃、高木は脚気の研究に没頭していたが、その研究成果についてもすぐに学生に講義した。「自分は人体実験をして、麦飯を食えば脚気を防ぐことが出来、治療も出来ることをはっきり証明した。この説は誰が何と言おうと絶対に曲げることが出来ない」と何度も強調したといわれる<sup>5)</sup>。むかし、ニューロン学説のカハール(Santiago Ramony Cajal, 1852-1934)が何か新しい発見をしたときは、いつもその最初の聴講者を彼の学生にしたと聞いたことがあったが、今そのことを思い出す。

このような社会的評価にもかかわらず(どこよりも学術優等な医師を育てていたにもかかわらず)、高木にはまだ満足できる気持ちにはなれなかった。もっと人間の力量のある人物に養成したかった。教師と学生、学生同士の間にしても、もっと好ましい人間関係を要求したかった。「学生は卒業するまではまだ良いが、一度卒業すると音信不通である。学校にいる間は暑中見舞とか年賀状とかなさるが、卒業生で年賀状を寄こす人は夜明けの明星を見たようなものである、これはどう云う意味であるのか、本当を云うなら年賀状でもださなければ落第でもさせやしないかと云う心配からでしょうと思います」と嘆いている<sup>6)</sup>(学生気質は今も昔もあまり変わらない)。

学生が高木校長の意向通りに成長しなかったのは、やはり医学教育制度、つまりこの医学校が乙種医学校であり、学生から予備校的気風を除くことが困難であったためではなかろうか。医術開業試験に合格しさえすれば(医師免許証を手に入れさえすれば)、この医学校とは何時でもおさらばできる、という気風が学生からどうしても抜けなかったためとおもわれる。

幸い、この医学校(東京慈恵医院医学校)は、1803(明治36)年に東京慈恵医院医学専門学校に昇格した。つまりこの学校を卒業するだけで(開業試験を受けることなく)医師になれることになったのである。

この機に高木はいろいろな教育改革を試み、彼の理想とする医師に育てたいと考えた。まずその一つが入学試験に品性試験(口頭試問)なるものをもつことであった。

この品性試験の由来については、新入生にたいして彼はこう説明している<sup>1)</sup>、「本校においては明治 35 年に方針を定め、同 36 年に専門学校にするに当たって、日本無類の校則を定めたのである。それは入学試験のなかに品性試験を含めるということである。たとえ学術が優れていても品性不良なる時は、その一身も立たず、一家も治まらず、一国に対する働きもまたその光を放つことが出来ない、故に品性ほど先なるものはないと文部省に向かって申請し、遂にこの規則が出来たのである。之れによって諸君はご入学になったのであります」と。

またこの試験の狙いについてはこう説明している。「新たに入ってくる諸君の精神は如何なる城に立て籠っているか、この城が破られんとする時、諸君には、わが生命を捧げてもこの城を守ろうとする精神があるかどうか、そのような根拠地があるかどうか、ということを一々お尋ねしたわけである」と<sup>1)</sup>。

高木がこの試験で問いたかったのは、実はこのような「自分の思想・信条」といったものであったのである。ただ実際に試問したのは多くの場合（時間の制限もあり）「君は信仰をもっているか?とか、どういう宗教に関心があるか?とか、将来どんな医者になりたいか?」などであったという。そして宗教に無関心であったり、はっきりした理想をもたない人間は、遠慮なく落第させたといわれる。

これは英国留学時に経験した人間にとってもっとも尊いものはその高尚な志、つまりその思想・信条にあることを痛感していたからであろう。

この英国のことについては最近、中野孝次（作家）がこのようなことを書いている。「現代の日本人がすべてエコノミックアニマルと見られるのは堪えがたい。もともと日本人は、人間において最も大切なのは品性つまり高尚な心境であると考えていた。このことを外国で講演して最もよく理解してもらえるのは英国のインテリたちであった。英国の知識人は、その国に質実な紳士の気風と伝統があるせいか、このことをよく理解してくれた」と。

### 「明徳会」の開講

1903(明治36)年6月、上述のように東京慈恵医院医学校は医学専門学校に昇格した。学術的な意味では一流大学に伍してもなら遜色ないと評価されていたので、高木の関心はむしろ学生の人間教育にあった(医師になったら患者ときちんと向き合わねばならず、しっかりした人生観、死生観をもっていなければならない)。高木はそれまで自重してきた道徳教育、さらにその根本たる宗教教育を始めたいと考えた。彼は、同年11月、学生、卒業生、学校が一体となった明徳会なる精神修養の講座を組織、開講した。そして毎月1回、第2木曜日の夕食後7時から9時まで約2時間を、当時の名僧高徳から講義を拝聴することにした。

この会の目的については大内青巒(明徳会講師)の講義がある<sup>5)</sup>。「校長さんに承りますと、品性試験に合格なさりこの学校で学んだ方が、いよいよこの学校を卒業なさるに当たって、その卒業の席次(卒業成績)は、学術の席次のみならず、この明徳会で養われた品性の優劣によって大きく変わるそうで、これが他の学校とチョット様子の違ふところであり、…しかるにこの明徳会の受け持つ時間は一ヶ月にわずか二時間しかない、学術の時間の五十分の一に過ぎない。この僅かの時間をもって、その五十倍の学術と相匹敵するように致さなければならない。そうしなければ学術の優等と同じ品性の優等を得ることはできぬ筈であります。従ってこの二時間というものは諸君にとってきわめて重要な時間であります。…

しからは、その品性とは如何なるものであるか、…それは全く学術とは性質の違ふたものである、どれ程に学術が優れた人であっても全く品性の悪い人がある、またその逆の場合もある。したがって如何にして品性を養うかという問題になると、これは必ず学術以外のところに求めなければならぬのであります。では何処に求むるか、本校においてはこれを明徳会に求むるのほかは無いのであります」と。

同氏はまた品性の本質についてこう論じている<sup>5)</sup>。「人間の品性とは一体何であるかを考えますに、どうしてもその人の見識というものが土台となって

参ります、では見識とはどんなものであるか、これまた限りもなく難しいことではありますが、我々の今日まで学びましたところによりますと、その根本は「慈悲」（現代風にいえば「愛」—筆者）ということになるかと思えます」と、つまり品性の根本はけっきょく慈悲にあるというのである。

明德会の会長はいうまでもなく高木兼寛であったが、幹事は仏教者・樋口繁次教授であったため、講義題目はしぜん仏教的なものが多くなった。そのためと思われるが、会のはじめにはかならず仏法僧に感謝する礼賛文、すなわち「人身受け難し、今已に受く、仏法聞き難し、今已に聞く、此身今生に向て度せずんば、更に何れの生に向てか、此身を度せん。大衆もろともに至心に三宝に帰依し奉るべし。自ら仏に帰依し奉る、自ら法に帰依し奉る、自ら僧に帰依し奉る。無上甚深微妙の法は百千万劫にも遇うこと難し、我今見聞し受持することを得たり、願わくは如来の真実義を解し奉らん」<sup>6)</sup>という礼賛文を斉唱してから講義を拝聴するのが習わしであった。

高木自身もその頃はかなり仏教に接近したようであった（その多くは娘婿でもある樋口繁次の影響とおもわれるが）。先の大内青巒はこのように述べている<sup>5)</sup>。「本会における品性の養成を仏教に求める理由を今さらあれこれ云うている暇はありませんが、とにかく高木先生のお見込によってそう定められたのであります。諸君にもそれぞれ理想とするところがあるでしょう、キリストを理想とするとか、孔子を理想とするとか、モット良いお考えの人も在るかも知れぬけれども、それはご自身一個のことで、この学校の特色とするところは仏教によって学生の品性を養うということに定まったのであります」と。

高木はよほどの情熱と信念をもって明德会を開講したらしく、学生にはその出席と拝聴をきびしく要求した。森田斎次（解剖学教授）の回想が残っている<sup>3)</sup>。「先生は講話の始まるまでに学生を講堂に入れて（出席をとったのち逃げないように—筆者）暫くのあいだ戸に鍵をかけられたことがありました。私は恐る恐る先生に『それは兎戯に等しいことでありますし、また危険でもあります』と申しますと、先生言下に曰く『主義のためには止むを得ん』と申されました。

以て如何に信念の厚きかを知りました」と。

高木の言い方があまりに直裁的であるために、かえってユーモアを感じざるほどである。

#### 4. 「明德会」講義集

明德会の講義は、毎月第二木曜日の夜に必ず行われた。講師を選び、講話を依頼し、題目をきめる手続きも大変だっただろうと推察される。1903(明治36)年から1920(大正9)年までに(つまり高木が亡くなるまでに)、約40名の講師が参加し、この間に行われた講義の題目は実に200題、その6割は講義記録として成医会月報に残っている(紙面の都合でここには講義題目しかあげることができなかったが、現在でも聞いてみたいと思う講義が数多くある。記録が残っていないものには、講義の行われた日時のみを示した)。

明德会は高木の死後、1937(昭和12)年ころまでは存続したらしい。しかしそれは普通の文化部のような形であつたらしく、記録は残っていない。いずれにしろ高木の信念の強さを示すものである。

##### 明德会における講義題目

講師	講義題目	講義・月・日ないし成医会月報・巻・頁
<b>1903年</b> (明治36年)		
神林 周道	講話	高木兼寛 訓辞 12月10日
<b>1904年</b>		
白山 謙致	宗教的修養	1月14日
大内 青巒	恭儉己を持す	1月14日
神林 周道	講話	2月11日
豊岡 立善	宗教に対する誤解	3月9日
加藤 咄堂	大和民族の死生観	3月9日
大西 信道	信行	4月9日
中島 観琇	義勇奉公	4月9日
中島 観琇	心	5月13日

大内 青巒 祈禱 5月12日

### 1905年

神林 周道 死を決して命を重ぜよ 2月9日  
 前田 慧雲 三宝即ち仏法僧の三宝 4月13日  
 大内 青巒 信行綱領(一) 274; 31-41  
 大内 青巒 信行綱領(二) 275; 42-49  
 大内 青巒 信行綱領(三) 276; 39-49  
 大内 青巒 信行綱領(四) 277; 44-61  
 大内 青巒 信行綱領(五) 278; 44-57  
 大内 青巒 信行綱領(六) 279; 39-53  
 前田 慧雲 三宝(仏法僧) 280; 39-48  
 前田 慧雲 (続き) 281; 53-59  
 加藤 咄堂 人生の意義 283; 41-58  
 村上 専精 青年に告ぐ 284; 48-60  
 村上 専精 規律的実践法 285; 56-60  
 村上 専精 (続き) 286; 46-56

### 1906年

大西 信道 精神修養 1月18日  
 大西 信道 自己の偶感 3月8日  
 南条 文雄 国史中の仏語, 六波羅に就いて 287; 42-55  
 大内 青巒 大祓と懺悔 288; 42-55  
 大内 青巒 年賀の式と報恩 289; 47-61  
 大内 青巒 承陽大師修証義第二十一節 291; 58-65  
 大内 青巒 (続き) 292; 37-43  
 斎藤 唯信 仏教道德の根源 293; 47-54  
 境野 黄洋 積尊に対する追慕の念 296; 49-62  
 前田 慧雲 人生 297; 37-41  
 前田 慧雲 (続き) 298; 22-29  
 大谷 愍成 成功 298; 29-35

### 1907年(明治40年)

高木 兼寛 歳暮の礼並びに年賀の礼節 1月17日  
 高木 兼寛 日常の衛生 5月9日  
 大内 青巒 古賀弥助の事蹟 9月19日

- 大内 青巒 四摂法 299 ; 39-46  
 大内 青巒 (続き) 301 ; 35-38  
 大内 青巒 精神病に対する医学と仏教 300 ; 41-47  
 加藤 咄堂 修養訓 302 ; 43-50  
 加藤 咄堂 (続き) 303 ; 39-45  
 中島 観琇 三宝の恩に就いて 304 ; 38-43  
 中島 観琇 (続き) 305 ; 42-51  
 大内 青巒 礼賛文 306 ; 53-57  
 大内 青巒 (続き) 307 ; 29-38  
 大内 青巒 教育勅語小釈 308 ; 40-51  
 大内 青巒 (続き) 309 ; 53-56  
 大内 青巒 (続き) 346 ; 40-44  
 大内 青巒 (続き) 347 ; 1-5 (付録)  
 大内 青巒 (続き) 348 ; 1-5 (付録)  
 大内 青巒 (続き) 349 ; 1-5 (付録)
- 1908 年**
- 高木 兼寛 梅田雲浜小伝 320 ; 57-61  
 大内 青巒 宗教的常識 12 月 10 日
- 1909 年**
- 大内 青巒 宗教的常識 (天台宗) 1 月 14 日  
 大内 青巒 宗教的常識 (真言宗) 2 月 18 日  
 大内 青巒 宗教的常識 (融通念仏宗, 禅宗) 3 月 11 日  
 大内 青巒 彼の宗教的常識 (臨済宗, 曹洞宗, 黄檗宗, 浄土宗, 真宗, 日蓮宗) 6 月 10 日  
 神林 周道 精神修養上に関する講話 12 月 9 日  
 加藤 咄堂 善悪論 323 ; 34-42  
 加藤 咄堂 (続き) 324 ; 41-51  
 穂積 八束 我が憲法の大意 325 ; 34-44  
 中島 観琇 修養と実行 327 ; 44-54  
 高木 兼寛 本校規則改正の要旨 327 ; 54-59  
 大内 青巒 罪 328 ; 40-55  
 大内 青巒 衛生と仏教 329 ; 46-52  
 大内 青巒 般若心経講義 329 ; 35-46

- 大内 青巒 (続き) 330; 37-46  
 大内 青巒 (続き) 331; 40-48  
 大内 青巒 古賀精里先生及び人格 332; 48-59  
 中島 観琇 上下一心 333; 57-64  
 中島 観琇 (続き) 334; 43-50

**1910年**

- 大内 青巒 年賀の詞 1月13日  
 神林 周道 伝道に関する卑見 2月10日  
 大西 信道 念仏 5月12日  
 新井 石禅 道德の基礎 9月15日  
 渡辺 海旭 大乘仏教の精神は何れにあるや 10月13日  
 新井 石禅 明德の資料 11月10日  
 祥雲 雄悟 修養論 335; 46-57  
 大内 青巒 願 336; 47-59  
 大内 青巒 漢学の勃興 337; 56-61  
 大内 青巒 (続き) 338; 54-59  
 大内 青巒 戊申詔書衍義 339; 71-79  
 久保田実宗 禅の修養 342; 45-50  
 加藤 咄堂 人生と修養 343; 46-55

**1911年**

- 井上 徳定 吉野の遺跡と精神修養 350; 1-5 (付録)  
 积 慶淳 金剛之人 351; 1-6 (付録)  
 积 慶淳 (続き) 352; 1-6 (付録)  
 大内 青巒 礼 353; 1-7 (付録)  
 大内 青巒 (続き) 354; 1-5 (付録)  
 大内 青巒 感応 355; 1-7 (付録)  
 积 宗活 仏教の二門 356; 1-6 (付録)  
 积 宗活 (続き) 357; 1-6 (付録)  
 坂田 良弘 犠牲献身の意義 358; 1-4 (付録)

**1912年 (大正元年)**

- 大内 青巒 天長節 11月17日  
 积 慶淳 惣該萬有之無尽莊嚴心 359; 1-5 (付録)  
 积 慶淳 (続き) 360; 1-6 (付録)

- 大内 青巒 他力教に就いて 361; 1-4 (付録)  
 大内 青巒 (続き) 362; 1-4 (付録)  
 大内 青巒 精神修養と仏教との関係について 363;  
 1-8 (付録)  
 村上 専精 日本一の偉人は誰なるか 364; 1-5 (付録)  
 村上 専精 (続き) 361; 1-5 (付録)  
 大内 青巒 積尊の遺言 366; 1-7 (付録)  
 大内 青巒 (続き) 367; 1-8 (付録)  
 中島 観琇 博愛に就いて 368; 1-5 (付録)  
 中島 観琇 (続き) 369; 1-5 (付録)

**1913年**

- 積 宗活 積尊涅槃 2月16日  
 大内 青巒 今昔陰陽道 5月18日  
 大内 青巒 教育と宗教との関係 9月21日  
 郁芳 瑞円 誠 11月17日  
 椎尾 弁匡 精神修養 12月21日  
 中島 観秀 徳器 371; 39-44  
 中島 観秀 (続き) 372; 97-101  
 加藤 玄智 宗教学者の眼に映ぜる乃木将軍 373;  
 153-161  
 加藤 玄智 (続き) 374; 210-219  
 加藤 玄智 (続き) 376; 319-323  
 大内 青巒 弘法大師の御事蹟 379; 465-474  
 大内 青巒 先帝御大葬儀遥拜式に因みて 380;  
 507-516  
 大内 青巒 (続き) 381; 561-570  
 雄谷 俊良 八正道 382; 613-618  
 雄谷 俊良 (続き) 383; 42-53

**1914年**

- 雄谷 俊良 人格修養の基礎となるものは宗教なり 1月  
 18日  
 田中 弘之 教育勅語と仏教教化の信状と対比し本邦の  
 如き教治国は欧米の如き法治国と異なる 3

月 15 日

- 田中 弘之 信仰心と勤勉勞力 4月19日  
 田中 弘之 乃木將軍 5月17日  
 加藤 玄智 我が建国精神の一特色 6月21日  
 椎尾 弁匡 諸悪莫作 9月20日  
 高木 兼寛 日本国民体位 1月22日  
 大内 青巒 文相の訓辭に就いて 384; 89-93  
 大内 青巒 (続き) 385; 134-141  
 田中 弘之 師弟の道交情義 386; 183-187  
 田中 弘之 (続き) 387; 234-238  
 大内 青巒 人心の帰向 388; 279-289  
 大内 青巒 恭儉持己 390; 376-382  
 大内 青巒 (続き) 391; 433-439  
 渡辺 海旭 仏教修養の五段階 392; 480-487  
 中島 観琇 信心 394; 567-575

**1915年**

- 宮沢 説成 仏道に就いて、本尊或は本尊論 2月21日  
 宮沢 説成 根本仏教 3月21日  
 高楠順次郎 仏法に於ける哲学上の精神、科学上の方法  
 6月20日  
 高木 兼寛 袈裟に就いての訓話 12月19日  
 椎尾 弁匡 自浄其意 395; 35-44  
 大内 青巒 時局と国民精神 396; 77-82  
 大内 青巒 (続き) 397; 129-135  
 大内 青巒 お花見 398; 180-186  
 大内 青巒 (続き) 399; 220-226  
 宮沢 説成 仏成道 400; 265-273  
 井上哲次郎 神道の特徴 401; 312-317  
 井上哲次郎 (続き) 402; 361-369  
 井上哲次郎 孔子に就いて 403; 414-420  
 井上哲次郎 (続き) 404; 460-466  
 高木 兼寛 訓示 405; 505-518

**1916年** (大正5年)

- 川面 凡児 日本神道の根本及我が国固有の忠孝の大道  
1月16日
- 高木 兼寛 国民道徳 2月20日
- 高木 兼寛 国民体育改良 10月15日
- 井上哲次郎 御大典に就いて 412; 293-297
- 井上哲次郎 (続き) 413; 333-340
- 井上哲次郎 再び御大典に就いて 414; 383-389
- 井上哲次郎 (続き) 415; 425-433
- 高楠順次郎 人格の向上に就いて 414・415; 86-95
- 中島 力造 欧州戦乱と其の戦乱に由て生じ来る変動また其の結果に対する我が国民の覚悟 416; 472-483

**1917年**

- 桑原 髓旭 礼儀上の徳 1月21日
- 加藤 咄堂 学生は何の為に学問するか 4月22日
- 姉崎 正治 国際関係と吾人の生活 6月17日
- 加藤 咄堂 徹底と人生 420; 91-95
- 加藤 咄堂 (続き) 421; 143-149
- 宮沢 説成 仏教の修養 422; 200-209
- 加藤 咄堂 言語に就いて 427; 434-442

**1918年**

- 矢吹 専輝 16世紀より20世紀に至る世界文学芸術の進歩発達を無我観に徴し述べる 1月20日
- 加藤 咄堂 自由平等思想と献身的犠牲精神 12月15日
- 加藤 咄堂 日本の国民性 431; 43-49
- 加藤 咄堂 (続き) 432; 101-109
- 山上 曹源 仏教的生活 433; 138-145
- 藤岡作太郎 文明が及ぼす宗教心の動揺 434; 191-200
- 加藤 咄堂 修養の根本としての仏教 435; 234-245
- 山上 曹源 随所為主 436; 288-295
- 加藤 咄堂 自覚 438; 365-371
- 加藤 咄堂 東西文明の相違 439; 394-402

加藤 咄堂 慈恵に就いて 441; 475-485

井上哲次郎 品性と人格 442; 514-524

### 1919年

井上哲次郎 日蓮上人の伝記 1月19日

高木 兼寛 神社概説の旨趣 3月17日

加藤 咄堂 支那香港上海広東マカオ阿瑪港マニラ等の  
曆遊談 4月20日

高木 兼寛 神儒仏の三教 4月20日

藤岡真一郎 米国雑感 5月18日

加藤 玄智 神社参拝の意義 9月21日

加藤 玄智 (続き) 10月16日

加藤 咄堂 宗教上より明治天皇の御製を拝す 446;  
130-138

加藤 咄堂 (続き) 447; 185-192

加藤 玄智 科学より宗教へ 448; 219-233

井上哲次郎 国体について 449; 261-273

加藤 咄堂 国民思想に就いて 450・451; 301-310

加藤 咄堂 (続き) 452; 364-370

### 1920年

高木 兼寛 静的教育動的教育の優劣区別 1月15日

高木 兼寛 一般学生の心得. 教育勅語の旨趣 2月19日

以上講義題目しか挙げられなかったが、講義の大体の印象はつかんでいただけだと思う。今でも聞かせてもらいたいと思う講義が数多く並んでいるのに驚く。

活字になっているものを通覧して種類分けしてみると、宗教関係（主に仏教）が全体のほぼ1/2、倫理、道徳関係がほぼ1/4、国体、皇族関係が約1/8、その他世界情勢などが残りの1/8ほどである。倫理、道徳などにしても宗教面から眺めたものも多いので、宗教関係がぜんたいの6-7割を占めていたのではないかと思われる。

講師として依頼した方は全体で40名にもなるが、その中では大内青巒、加

藤咄堂，井上哲次郎，加藤玄智らの出講が多く，この4人だけで全体の半分以上を占めている。したがってここには明徳会の雰囲気をつかぐ資料としてこの4人の紹介を簡単にしておく。

大内青巒(オオウチ セイラン，1845-1918) 明治期の曹洞宗の僧。仙台藩士の子。西本願寺法主大谷光尊の侍僧となり，禅浄一致を説いた。明治7年仏教界初の雑誌「法四叢談」を，翌年仏教界初の新聞「明教新聞」を創刊。尊皇奉仕大同団を結成し，死刑廃止運動を展開。大正3年，東洋大学長。明徳会の発展にはもっとも熱心で，全講義の約3分の1をうけもった。

加藤咄堂(カトウ トツドウ，1870-1949) 明治，大正期の仏教宣伝家。丹波亀岡の没落士族の子。東京法学院卒業。大正13年以降は仏教の中央教化団体連合会の中心的存在。雑誌「新教養」「こころ」などを主宰。

井上哲次郎(イノウエ テツジロウ，1855-1944) 明治，昭和期の哲学者。筑前生まれ。東大卒，ドイツに留学，明治23年東大教授。キリスト教を排撃し，日本主義を唱えた。著に「日本朱子学派の哲学」「日本古典学派の哲学」などがある。

加藤玄智(カトウ ゲンチ，1873-1965) 明治，昭和期の宗教学者，神道学者。東京生まれ。東大哲学科卒。東大，国学院大で宗教学，神道を講義。著に「本邦生祠の研究」「神道の宗教発達史的研究」などがある。

## 5. 「明徳会」と宗教

高木が，理想をはっきりもった学生を入学させるために品性試験なるものをもうけ，また入学した学生には精神修養のために明徳会なる講座を開いたことはくり返し述べた。

高木がこの品性試験と明徳会に期待したものは，まず学生の品性を涵養し高めることであつた。彼は，医師の真価はその学術と品性にあり，しかも学術と品性とは別のものであり，如何に学術を錬磨しても品性を高めることはできないと考えていた。その意味でこの品性の養成こそはまことに重大であり，彼が明徳会を開いて，それにはげしい情熱を傾けたのも当然であつた。

現在、医師の品性の低下がさかんに嘆かれているが、その意味でかつて明治期にこのことに気づき、明德会を組織、開講し、学生の品性の涵養（心の教育）に努力した彼の行動はいくら高く評価しても、高過ぎることはないであろう。

明德会では、先にみたように、宗教(仏教)の講義が大部分を占めたが、それは「心の教育」には道德の教育のみならず、さらにその根本たる宗教の教育がより重要だと考えたからであろう（それはまた幼時の母の教え「神仏は常に我らに添うておられる、朝に夕に神仏のお示しになる人の道以外のことをしてはならぬ」からきているようにも思われる。高木は生涯そのことをしばしば述懐しているからである）。

道德と宗教の関係については、かつてドストエフスキー（Fyodor Mikhailovich Dostoevskii, 1821-1881）が人生の深刻な問題として追求したが、それはそもそも神が存在しなければ善も悪もなく、あらゆることが許されるのではないか、神を信じなければ道德というものはありません、いかなる卑劣な行為でも許されるのではないか、ということであった。この種の問題に対して神学者・ブルトマン（Rudolf Karl Bultmann, 1884-1976）は、（先述の高木の例え話と同じかたちで、）このように簡単にまとめている。「花は根があればいつまでも枯れない。根のない花はすぐに枯れる。花を道德にたとえるなら根は宗教に当たるだろう。宗教という根をもつ道德はいつまでも枯れることがないが宗教を失った道德は瞬くうちに力を失ってしまう」と。

### 医療・宗教・慈悲

明德会の初期の講義で高木は仏教についてこのように述べている（先に触れた明德会で斉唱する礼賛文の解説である）<sup>1)</sup>。「宇宙の諸現象すなわち古来萬有ことごとく変化するなかで、我々が人間に生まれてきたことは幸運中の幸運であった（人身受け難し）。どうして我々は幸運にもこの地球上に人間として生まれてくることができたのか、その説明を聞きたいところであるが、なかなかそれは難しい（仏法聞き難し）。いまようやくその道理を仏教に聞くことができた（今已に聞く）。それはすべて仏の力であることが分かった（無上

甚深微妙の法に遇う)。これからは仏が示された法にすがり助けられて生きねばならない(自ら仏法に帰依し奉る)」と。

一般に仏教のみならず宗教は、人間の自己について考えさせるものである。そして絶対者(神仏)の前では、すべてが相対的であり、小さい存在にすぎない。人間も自然のなかの一つの存在にすぎず、弱く過ちを犯しやすいものである。だから人間どうし互いに助けあわねばならない、相手の心をなぐさめ安らかにせねばならない、と教えるのである。

仏教はまた人生を生、老、病、死の苦の相としてとらえる。生きるためにはお互いに仏の慈悲に由来する慈しみの心をもって接すべきであると説く。そしてこの四苦と直接対峙するのは医師であるから医師には、患者の痛み、悩み、苦しみに共感し、これをいたわり、なぐさめる感性がぜひ必要になるのである。高木が明徳会に期待したのも、実はこの医師にとって必要な感性の教育であったとおもわれる。つまり「医の心」の涵養であったのである。

大内青巒が明徳会の講義のなかで(先述)「人間の品性とは一体何であるかを考えますに、……けっきょくのところ、その根本は『慈悲』ということになろうかと思えます」と述べた慈悲の心とは、医師に必要なこの感性のことであり、また「医の心」のことだったのだらうと思われる。要するに高木が明徳会に期待したのは、他人の痛みが分かる医師を養成することであったのである。

また病気は一体に患者の肉体のみならず、心を孤独にするものである、そして孤独であるかぎり何か永遠絶対なものを求めるものである。医師は、この患者の孤独感やその心理についてもよく理解せねばならない。高木は、病院内に患者のための説教所をもうけ、増上寺から僧を招いて、患者のために毎週説教を聞かせたという。彼らの苦痛や孤独感にたいして、宗教の面からも何とか慰めといたわりを与えたいと思ったのであろう。

(話の筋から少しはずれるが)司馬遼太郎(作家)が、坂本龍馬や西郷隆盛の人間性を論ずるさい、しばしば「感情の量の多い人」と表現しているが、高木が目指した医師像も何かこれに近いものではなかったかと思われる。坂本、西郷らは、何時でも何処でも何度でも、相手の気持ちになることができ、ま

たその気持で対応することができたといわれる。

### 高木兼寛は「神道・禊の行」へ

明德会では高木も一人の熱心な聴聞者であった。彼は仏教のなかでは次第に禪的なものに惹かれていった。明治末ころからさかんに同僚後輩に書きあてた紙本「雪竹たたくも慈悲のころかな」などにも、そのころの禪的(汎神論的)な気分をあらわしているように思われる。

同じ頃(1910(明治43)年、高木61歳)、高木夫人・富は腎盂炎を患い、続いて高木自身も肝炎、胆嚢炎を患った。いずれも大病であったため、高木は半年以上も病の苦しみのみならず、老いの寂しさをも味わうことになった。今まで自分の健康を信じ、はげしく行動してきた高木には意外な出来事であった。

病気になる老年になると、人はいつの間にか生活から人生の次元に入りこむといわれる。生活必ずしも人生ではない。生活は、ほんらい自分の心の奥底にあるもの(自分の人生の核になっているもの)を隠さないと成立しないものである。しかし病気や孤独な老年になると、否でも応でも今まであらわにしたことのないこの「本当の自己」と「死」の問題に直面せねばならなくなる(権力や地位や名誉といった世間体や外ずらの生活にいつまでも夢中になっているわけにはいかなくなるのである)。高木も、今まで世間体や外ずらのために大事にしてきたものをいったん捨て、急いで「自己」と「死」に対して向きあわねばならなくなった。

高木はこの大病を契機に、とつじょ神道の信仰に傾いていった(大正4年頃から)。彼は古典研究会の師・川面凡児にしたがい神道・禊の行に入ることにした(その行というのは、絶食にちかい粗食をとりながら、また冷水に身体を浸しながら、はげしい運動をくり返すというもので、行がすすむにつれて神我一体の悟りの境地に到達できるという)。彼は慈恵医学校の教員、学生の有志をあつめ、率先してこの行に没頭していった(禪とこの神道との類似性については以前にふれたことがある<sup>8)</sup>)。

そしてある宗教的悟りともいうべき境地に到達することができた。彼は神

の实在を信じ、宇宙萬有の生命を信じ、神性（仏性）の人間に具有することを深く信じた。そしてこの信仰から彼は、医療にたいして「God is good. 神は善なり。神に代わって善をなすは医師の義務なり」と結論した<sup>9)</sup>。

高木は1920（大正9）年に逝去するが、そのころ学生に与えた言葉が児玉周一（外科学教授、大正6年卒）の回想文にのこっている。「兼寛先生からの遺訓として心に残る言葉は、人は常に With smiling で終始しなければならないということであった」と。きびしい修業と深い信仰の世界にあった高木の言葉として、また生来剛直そのままの生き方であった彼の言葉として、とくに興味深い。

慈恵医学校が（他校に較べて）もっとも大きく発展したのは専門学校になったころから第二次大戦のころまでだといわれる。そしてそれと軌を一にしてこの医学校の卒業生から多くの教授、研究者を輩出し、また各地域の医療界では多くの卒業生が医師会の中核として大きく活躍した。この医学校の発展はいうまでもなくその卒業生の精力的な活躍によるわけであるが、そのもととはといえば実にこの明徳会にあったのではないかと思うのである。彼らの多くは、高木が期待した人間的力量をそなえた優れた医師であったのではないだろうか。いうならば今日の慈恵の隆盛の要因の一つはこの明徳会にあったように思うのである。

同じ時期、他の多くの医学校生が権威主義的な傾向（医師が尊大になる傾向）にながれていったなかで、わが明徳会がこの傾向に抵抗し、多くの病者と医療人に尊敬される医師を育てたことは、きわめて高く評価されてよいと考える。そして明徳会のこの基本思想は、現代医療にみられる全人的医療の欠如や医学教育における知識偏重などの傾向に対しても、何らかの解決策を与えてくれるように思えるのである。

## 6. あとがき

高木は明德会における高尚な精神教育のみならず、日常的な服装、作法についての教育にも心をくだいた。医師たるものは常に高尚なる品性を保たねばならないが、内なる精神の品性は外なる服装、作法の品性にもあらわれるからである。このことに関連する多くの逸話の中からその二三をここに紹介する。

### 第一話（学生・永山武美の話）<sup>3)</sup>

いよいよ母校を卒業する日には、一日を教職員とともに一流の西洋料理店に招待されました。校長(高木)先生は、医者となり外国人と一緒に食事しても笑われぬようにとのお気持ちから、毎年この催しをされたのであります。築地の精養軒とか、芝の三緑亭などがお得意でした。一同はこういう立派なところは大体初めてでした。

食卓についていると、やがてスープが運ばれてきます。さっそく頂戴しようとする、ヤオラ校長先生は立ち上がって、大声一番スープの飲み方について講釈される。「スープは音を立ててはいかぬぞ。紳士というものは、スープは吸わずに口にアケルようにすべきだ」。それでもイザとなると四方八方にズーズーという音が聞こえてくる。校長先生はせわしく立っては再三注意を与えられる。

次は魚である。「諸君、魚は、諸君の前に青龍刀のようなナイフがあるだろう、それを使うのじゃよ」と叫ばれて自ら取ってナイフとフォークを高く捧げられる。そのころは、もうこっちは空腹で早く平らげたい一心です。「弱るな」と不平を申すものもありました…。(西洋の作法を教わるのも楽ではなかったらしい一筆者)

### 第二話（学生・新津茂良の話）<sup>7)</sup>

朝登校してくると、校長先生が校門のところ立っていて一人一人に握手されるのです。そして服装が乱れていると先生みずからそれを直されます。たとえば当時は、和服ではかまをはいていたんですが、みんなの前で裸にされ、

本当のふんどしはこういうぐあいにやるんだ、と侍のやり方でふんどしをしめさせられる。きまりが悪いなんて言っちゃいられませんでした。先生はフロックコートか何か立派な洋服を着ておられたのですが、洋服が汚れるのもかまわず、砂利の上にひざまずいて口で説明しながらはかまをはかせるのです。

### 第三話（学生・柿本庄六の話）<sup>3)</sup>

校長先生は校門のところで一々服装を点検なさる。自分はある時ちょっと遅れていった。やはり校長にやられた。中に入れないうという、それで私は、「先生、この学校にはそんな校則がありますか」というと、

「校則にはないが、校長が命ずる」という。

「それはいかん、規則にないものを先生に命ぜられても迷惑だ、しかも先生ははっきり規則に違反したのは放っておくのですか」

「そんなことはない。規則に違反した者は罰せられねばならない」

「それではお伺いしますが、わが校の規則には制服制帽たるべしと書いてある。しかるに制服制帽は僕と野口と石川の三人よりほかに一人もいないじゃありませんか」というと、

「それは皆が苦学しているから、便宜上黙認しているのだ」

「それは冗談でしょう。日本で一番月謝の高いのはこの学校じゃありませんか。それほどなら月謝を安くしたらよいじゃありませんか。」

もう一つ伺いたいことは、本校は東京慈恵会医院の附属です。それで皇后陛下が年に一度行啓されます。そのとき小学校の生徒は両側に立ってお迎えするのに、本校の生徒は何故奉送迎しないのですか。校長が自分の考えで制服を作らせずに、皇后陛下に親しむ機会を阻むというのは重大な錯誤です。ことに軍人たる閣下としては非常な間違いであります」とやった。校長も興奮したらしく、

「こっちへ来い！」と校長室につれていかれた。しかしそこで色々話をしているうちに、だんだん校長の方の風向きが悪くなってきて、けっきょく話のすえに制服制帽を実行するということになった。そしてその年の五月五日の皇后陛下の行啓の折りには、白リンネルの夏服でお迎えすることになったので

あった。

創設者であり校長である高木と学生との関係といえ、普通はその間に何となく無用な鋭さをもちがちであるが、これらの話には不思議とそれがみられない。おそらくそれは高木にさまざまな意味での相手（学生）を怒る気分があるからではないだろうか。怒の底に多量の愛情があるからであるように思われる。

またどの話にも（感ずるのであるが）高木の言動には何か凜としたおかしみがある。そしてそのおかしみのもとといえ、これまた学生への愛情の深さからきているように思われる。これを多量に藏していなければ、第三者にとって愛（いとお）しきとしてのおかしみは感じにくいものである。とにかく高木の行為には何ともいえぬおかしみがある。

明德会の講義集は現在慈恵医大医学情報センター・史料室によって編集されつつある。慈恵医大の歴史にとってもまた一般思想史、教育史にとっても貴重な資料になるものと信ずる。

## 文 献

- 1) 高木兼寛。訓示。成医会月報 1915；405：505-518.
- 2) 成医会月報編集部。医風改良案。成医会月報 1882；1：22-31.
- 3) 梅沢彦太郎編・近世名医一夕話「高木兼寛」。東京：日本医時新報社，1937.
- 4) 成医会雑誌編集部。追悼演説。高木兼寛先生追悼特別号 1921；19-44.
- 5) 大内青巒。承陽大師修証義第二十一節。成医会月報 1906；291：58-65.
- 6) 大内青巒。礼賛文。成医会月報 1907；306：53-57.
- 7) 慈大新聞編集部。慈恵外史。東京：慈恵医大同窓会，1985.
- 8) 松田 誠。最後の高木兼寛。慈恵医大誌 1993；108：585-590.
- 9) 飯田芳久。高木兼寛先生。日本医時新報 1962；1980：25-28.